

陶淵明「擬古」詩其一再考

宇賀神 秀一

はじめに

親しい人と離れ隔たっている状況において、次に再会し得るのは何時になるのか、そもそも再会し得るのか、という憂いは非常に耐え難いものである。人々はそのような憂いに悩まされ、時に再会を果たす願いや、安否を気遣うおもいを手紙に託し、手紙の受取手は、それを肌身離さず身に着けたりする。このような固い節操を貫く人々がいる一方で、時に旅人は異郷に身を寄せるなかで二心を抱くこともあれば、かえって故郷の待ち人が裏切ることもある。

本稿において考察の対象とする陶淵明の「擬古」詩其一は、先学の注解が物語っているように、実に様々な解釈が為されている。そのなかでとりわけ解釈が対立しているのは、語り手を旅人とするか、待ち人とするか、という点である。これは「擬古」詩の第十句「遂令此言負（遂に此の言をして負かしめたり）」の主語とも相互に関わるものであり、うた全体の理解に連なっていく重要な問題である。

本稿では、「擬古」詩其一における語り手の立場は旅人であるのか、それとも待ち人であるのかという点、及び「遂令此言負」という句について、まずは諸家の注解を概観し、解釈の相違が生じる所以と、諸家の見解の妥当性に検討を加え、その上で本稿の結論を提出することにした。

一

それでははじめに「擬古」詩其一の全文を掲げよう。

栄栄窗下蘭 栄栄たり 窗下の蘭

02 密密堂前柳 密密たり 堂前の柳

初与君別時 初め君と別れし時

04 不謂行当久 謂わざりき 行当に久しかるべしと

出門万里客 出門すれば万里の客

06 中道逢嘉友 中道にて嘉友に逢う

未言心先醉 未だ言わず 心 先ず酔い

08 不在接杯酒 杯酒を接するに在らず

蘭枯柳亦衰 蘭枯れ柳も亦た衰う

10 遂令此言負 遂に此の言をして負かしめたり

多謝諸少年 多謝す 諸少年

12 相知不忠厚 相い知ること忠厚ならず

意气倾人命 意气 人命を傾く

14 離隔復何有 離隔 復た何か有らん

改めていえば、先学の見解において、解釈が大きく対立しているのは、第五句の「出門」以下にうたわれる旅の主体を語り手自身とするか、あるいは第三句の「君」を旅の主体とし、語り手は待ち人の立場とするか、という点である。鈴木虎雄氏は第四句について、「わたしの旅行」と解しており、星川清孝氏は、「門を出て万里の遠方への旅人となった私は」と解している。その一方で松枝茂夫・和田武司氏は、「門を出て万里の客となった君たちは」と解している。現代の中国の諸家は、概ね後者の見解を採っており、龔斌氏は「案君指遊子、即後文万里客（案ずるに君は遊子を指す、即ち後文の万里客）」と指摘しており、謝先俊・王勳敏氏は、「你出門就遠遊他郷、半路上結識了好朋友（あなたは門を出て遠く異郷に旅に出て、その途中でよき友人と知り合いになった）」と解するなどである。

以上を踏まえて語り手を旅人としている一海知義氏の通釈を挙げる。

咲き誇る 窓の下の蘭 生い茂る 座敷の前の柳 あの日君らと別れたとき 長旅になろうとは思わなかった
門を出れば万里をゆく旅人となり その途中ですばらしい友に出あった 口もきかぬ先に酔い心地になった
酒杯を手にしたわけでもないのに 蘭は枯れ柳もしおれたいま あの約束にはそむくこととなった あいさ
つを送る 若ものたちよ お互いの間に深い信頼はなかったのだ 命をかけて意気投合したものなら 離れて
いつも平気なはずだ。

併せて、語り手を待ち人としている田部井文雄・上田武氏の通釈を挙げることにする。

盛んに咲く窓の下の蘭の花、盛んに繁茂する表座敷の前の柳。諸君と別れたばかりの（あの）時には、（諸君の）旅が（こんなにも）長くなるうとは、思い掛けないことであった。（人は、わが家の）門を出れば、万里を行く旅人（の身の上）となるもの、（そして諸君はその）道中でよい友に出あった。まだものも言わぬうちから、早くも（友情に）酔いしれた心情となった。（そして、それは）杯の酒を手にしたからではなかった（はず）。（諸君が出立の時に見た）蘭は枯れ、柳もまた衰えて（秋となって）しまった今、とうとう早く帰るという約束の言葉にそむくこととなった。（そこで）心をこめて申し述べよう、若い諸君よ、（お互いに）理解し合う上で、深い信頼関係にまで至っていなかったのだと。（真に）意気投合したら、人はその命をかけるもの、（どんなに）離れへだたっていたとしても、いったい、どんな障害があるうか¹⁰⁰。

両者の解釈で共通しているのは、「君」と「諸少年」を同一方向のものとして解することや、第十一句の「多謝」以下を、語り手と「君」、及び「諸少年」の関係をうたったものと解することなどである¹⁰¹。

さて、「擬古」詩其一の第六句の「嘉友」のイメージをどのように捉えるのかというのは、語り手の立場を考えていく上で要となる問題である。

たとえば、語り手を旅人とする釈清潭氏は、旅人と「嘉友」との出会いについて、「其の権び形容する物なし、権喜の極酔ふが如し」と解している。また、鈴木氏は、「この人とは酒や杯をつきあわせるまでもなく、ものも言わぬ先きから酔うたやうにこちらの心がまゐつてしまった」と解しているように、旅人と「嘉友」の出会いを肯定的なイメージで捉えている。

一方で語り手を待ち人とする孫鈞錫氏は、「這兩句写与『嘉友』結交之軽率、不待杯酒言飲、便一見傾心（この両句は『嘉友』との交際が軽率であることを記したものであり、杯を交えて語り合うこともせず、一目惚れしてしまったのである。）」と注しており、松枝・和田氏は「（未言）……この二句『嘉友』との出逢いが軽率であったと皮肉をいつているのであろう」と注している通り、「君」が「嘉友」と酒杯を酌み交わす以前に、相手を信頼したものととして「嘉友」との交際を否定的なイメージで捉えている。

このような「嘉友」を取り巻くイメージについては、第十句「遂令此言負」から第十一句「多謝諸少年」以下への展開も考慮されなければならない。一海氏は、「あの約束にはそむくこととなった」と解しており、本句の主語に当たるのは、語り手の旅人である。同様に鈴木氏は、第九句から十二句の展開について、「故郷にかへらず、まへにぢきにかへるやうにいうたそのことばに負くことになった、あなた方少年たちにおことわり申すが、あなたがたは自分とは相知ることがまめ／＼しく手あつくはないのだ」と解している。この場合、旅人が故郷に「君」を待たせていることに非があるばかりで、待ち人に非はみられない。そうであるにも拘わらず、「多謝」以下で、待ち人に対して批判的な辞句をうたっているものとするのは、多少の不自然さが残ることは否めない。その一方で松枝・和田氏や田部井・上田氏は、「君」を旅人とし、「遂令此言負」における主語も「君」と解していることから、第十句から十四句への展開は比較的筋の通ったものといえるだろう。

また「遂令此言負」の「此言」について、釈清潭氏は「此言の文字に就いて作者淵明以外には何を以て此言と為すや、一読解すべからず」と述べて、本句の「此言」は淵明以外に解し得ないものと説いている。確かに「擬古」詩其一の「此言」は、先例と比較してみても特殊なものである。「此言」はたとえば「古詩為焦仲卿妻」において次のようにうたわれている。

卿当日勝貴 卿当に日に勝りて貴かるべし

吾独向黄泉 吾れは独り黄泉に向かわんと

新婦謂府吏 新婦 府吏に謂う

何意出此言 何の意か此の言を出だす

(『玉台新詠』卷一)

このうたでは直前の府吏の発言を指して、「此言」を用いているのであろう。また、王粲の「七哀詩」では、路上で餓えきった婦人が子を棄てた場面で次のようにみえる。

路有飢婦人 路に飢えたる婦人有り

10 抱子棄草間 子を抱いて草間に棄つ

顧聞号泣声 顧みて号泣の声を聞くも

12 揮涕独不還 涕を揮いて独り還らず

未知身死处 未だ身の死なんとする処を知らず

14 何能两相完 何ぞ能く両つながら相い完ったからんと

驅馬棄之去 馬を驅つて之を棄てて去る

16 不忍聽此言 此の言を聴くに忍びざればなり

(『文選』卷二十三、全二十句)

ここでは婦人の発言を承けて「此言」を用いているのであろう。このように「此言」とは、「此」字を用いている以上、対話のなかの直前の発言を承けるものである。しかしながら「擬古」詩其一で第十句の「遂令此言負」に至るまでに、語り手と「君」が対話している可能性があるのは、第三・四句の「初与君別時、不謂行当久」においてしか有り得ない。これは上掲の用例とは明らかに傾向を異にしており、第三・四句にしてみても、明白な対話とも発言とも断じ難いものである。

以上のことを踏まえて諸家の見解をみてみると、「此言」の解釈については概ね三つに分けられる。一海氏は「此言」について、「早く帰るつもりだと約束したことば。さきの『不謂行当久』のうちの意味をいう」と注しており、田部井・上田氏は、「早く帰るといふ約束の言葉」と解している。また古直氏は、「『此言』者、初別時之言也（『此言』とは、初め別れし時の言なり）」と説き、『楚辞』九章の「抽思」篇に、「昔君与我誠言兮、曰黄昏以為期。羌中道而回畔兮、反既有此他志（昔君と我と言を誠す、曰く黄昏以て期をなさんと。羌中道にして回り畔き、反つて既に此の他志有り）」とあるのを引用しており、黄昏時を再会の期日とするとうたっていることから、再会の約束と解せよう。一方で松枝・和田氏は、諸家と同じように「別れるときの約束」と注しつつも、その内実については「（仕官せずによく帰ってきて共に隠棲しようという）」と解している。

このように「此言」に関して様々な解釈が行われているのは、読み手の解釈に委ねられているところが多分にあるためである。釈清潭氏が「作者淵明以外には何を以て此言と為すや」と述べているのも充分に頷ける。

さて、以上の疑問点を承けて、次に淵明の「擬古」詩の第一句から四句の措辞を窺うことから論を進めることにする。

二

淵明の「擬古」詩其一における第一句から四句の措辞は、「古詩十九首」其二、及び其一の兩詩と近似している。まずは「古詩十九首」其二と比較検討を加えていこう。

青青河畔草 青青たり 河畔の草

02 鬱鬱園中柳 鬱鬱たり 園中の柳

盈盈楼上女 盈盈たる 楼上の女

04 皎皎当窗牖 皎皎として 窗牖に当たる

娥娥紅粉粧 娥娥たる 紅粉の粧

06 織織出素手 織織として 素手を出す

昔為倡家女 昔 倡家の女為り

08 今為蕩子婦 今 蕩子の婦為り

蕩子行不歸 蕩子 行きて 歸らず

10 空牀難独守 空牀 独り 守り難し

(『文選』卷二十九)

「青青」「鬱鬱」といった疊字を対偶とし、「河畔」「園中」という場所、さらにまた「草」と「柳」といった植物を対偶として連ねているのは、淵明の「擬古」詩の第一聯「榮榮窗下蘭、密密堂前柳」という句作りとよく似て

おり、「擬古」詩の措辞が「古詩十九首」其二の措辞と近似していることからすれば、「古詩十九首」其二と同じように、故郷に身を置いていた待ち人の立場からうたわれているものと想定されるだろう。

また、「擬古」詩の第三句「初与君別時」については、次に挙げる「古詩十九首」其一の第二句とよく似た句作りでうたわれていることも看過し難い。

一行行重行行 行行重ねて行行

02 与君生別離 君と生きながら別離す

相去万餘里 相い去ること万餘里

04 各在天一涯 各おの天の一涯に在り

道路阻且長 道路阻しく且つ長し

06 会面安可知 会面安んぞ知るべけん

胡馬依北風 胡馬北風に依り

08 越鳥巢南枝 越鳥南枝に巢くう

相去日已遠 相い去ること日びに已に遠し

10 衣帶日已緩 衣帯日びに已に緩む

浮雲蔽白日 浮雲白日を蔽い

12 遊子不顧反 遊子顧反せず

思君令人老 君を思えば人をして老いしむ

14 歲月忽已晚 歲月 忽ちにして已に晚れる

棄捐勿復道 棄て捐てて復た道う勿かれ

16 努力加餐飯 努力して餐飯を加えよ

〔文選〕卷二十九

淵明が「初与君別時」とうたう際に、その意識に「古詩十九首」其一の「与君生別離」が上っていたとすれば、読み手にどのように伝わるのかを考慮していたはずである。

しかしながらこのうたも淵明の「擬古」詩と同じように、語り手の立場を旅人とみるか、待ち人とみるかで議論の分かれる作品である。このことについて吉川幸次郎氏の論述を参照しながら説明すれば、李善、及び五臣などの説では、放逐の旅にある忠臣が主君におもいを馳せる詩と解している。一方で、清の方東樹は「室思之詞」と解している。あるいは、第九句以下の換韻から、第一句から八句は旅人の立場から、第九句から十六句においては待ち人の立場からうたっているものとも解せよう。なお、陸機の「擬行行重行行」詩、及び劉鑠の「擬行行重行行」詩は、待ち人の立場からうたっている。

李善、及び五臣などの説を採れば、「擬古」詩の語り手は旅に身を寄せていることになるだろう。陸機の「擬行行重行行」詩がもとうたに密着して行われていたことを踏まえれば、陸機は待ち人のうたと解していた可能性が高いであろう。これは方東樹の説に連なるものといつてよい。つまり、「古詩十九首」其一の語り手の立場における対立した解釈は、古くより並び行われていたであろうことが窺える。

要するに淵明の「擬古」詩其一の第三句は、第五句への展開に関わる重要な一句であるが、旅人と待ち人のいずれの立場からも展開し得る可能性が内在されている。このことからすれば先学の解釈の対立は必然的に起こり得る

ものであったといえる。

三

第五句から第八句の「出門万里客、中道逢嘉友。未言心先醉、不在接杯酒」について、語り手を旅人する諸家は、旅人と「嘉友」の関係を肯定的なイメージで捉えている。一方で語り手を待ち人とする諸家は、「君」と「嘉友」の関係を否定的なイメージで捉えている。

ところで蘇軾は「和陶擬古」詩其一の次韻詩で次のようにうたっている。

客居遠林薄 客居 林薄に遠く

02 依牆種楊柳 牆に依りて楊柳を種う

帰期未可必 帰期 未だ必ずべからず

04 成陰定非久 陰を成す 定めて久しきに非ず

邑中有佳士 邑中に佳士有り

06 忠信可与友 忠信 与に友たるべし

相逢話禪寂 相い逢いて禪寂を話し

08 落日共杯酒 落日 共に杯酒す

艱難本何求 艱難 本と何をか求めん

10 緩急肯相負 緩急 肯えて相い負かんや

故人在万里 故人 万里に在るも

12 不復為薄厚 復た薄厚を為さず

未尽鬻衣裳 未だ尽く衣裳を鬻がず

14 時勞問無有 時に勞らいて無有を問う

「客居」に身を寄せ、隱棲の地である「林薄」から遠ざかりゆくのは、語り手自身と考えてよいだろう。また、第五句の「邑中」が、淵明の「擬古」詩の旅先である「中道」に対応しており、「佳士」が、「嘉友」に対応していることは明らかであろう。なお、蘇写本『陶淵明集』の「擬古」詩其一が、「嘉友」を「佳友」に作るのも偶然ではなからう。蘇軾は、淵明の「擬古」詩の「嘉友」ないし「佳友」の人物像を「忠信」と解し、彼を「友」とするに値することをうたっている。

このように蘇軾は「嘉友」の人物像を「忠信」と示している。これは旅人と「嘉友」の「不在接杯酒」という酒杯を酌み交わしていない関係に、司馬遷と李陵の関係を見出していることであろう。古直氏は「不在接杯酒」について、『漢書』司馬遷伝に、「夫僕与李陵俱居門下、素非相善也、趣舍異路、未嘗銜盃酒接殷勤之歡（夫れ僕と李陵とは俱に門下に居りて、素に相い善しきに非ざるなり、趣舍路を異にし、未だ嘗て盃酒を銜えて殷勤の歡に接せず）」とあるのに基づくものとする。司馬遷は、李陵と酒杯を交わして喜びを分かち合った関係でもないにも拘わらず、李陵のことを命懸けでかばったのである。つまり、酒杯を酌み交わしていないからといって、そこに信頼関係がないものとは考え難いのである。やや時代を降ってみると謝朓・江革・王融らによる連句「阻雪」詩におい

て、王融は次のようにうたっている。

珠囊条間響　珠囊条間の響き

02 玉溜檐下垂　玉溜檐下垂る

杯酒不相接　杯酒相い接せざるも

04 寸心良共知　寸心良に共に知れり

(巻五³⁸)

このうたでは酒杯を酌み交わさずとも、互いにその心を深く理解し合っていることをうたっており、酒杯を酌み交わすことなど要さない厚い信頼の情がみて取れる。

さらにいえば、「擬古」詩九首ではしばしば歴史的な人物、地名、故事などを採り上げる傾向があり、其二においては次にようにうたっている。

聞有田子泰　聞く田子泰なるもの有り

06 節義為士雄　節義士の雄たりと

斯人久已死　斯の人久しく已に死す

08 郷里習其風　郷里其の風に習うと

(全十二句)

ここでは三国魏に活躍した田疇、字は子泰、或いは子春を採り上げており、彼の二君に仕えることを潔しとしな

かった「節義」を称えている。また、其六においては、「厭聞世上語、結友到臨淄。稷下多談士、指彼決吾疑（世の語を聞くを厭い、友を結ばんとして臨淄に到らんとす。稷下に談士多し、彼を指さして吾が疑を決せん）」（全十八句中の第五句から八句）とあり、これが『史記』孟子伝において、「自騶衍与斉之稷下先生如淳于髡・慎到・環淵・接子・田駢・騶奭之徒、各著書言治乱之事、以干世主、豈可勝道哉（騶衍より斉の稷下先生の淳于髡・慎到・環淵・接子・田駢・騶奭の如きの徒の与ぶまで、各おの書を著して治乱の事を言い、以て世主に干む、豈に道に勝るべけんや）」とあるのを踏まえていることは明らかであろう。加えて其八では次のようにうたっている。

飢食首陽薇 飢えては食らう 首陽の薇

06 渴飲易水流 渴しては飲む 易水の流

不見相知人 相知の人に見えずして

08 惟見古時邱 惟だ見る 古時の邱

（全十二句）

「首陽薇」は、伯夷・叔齊、「易水流」は、荊軻に因んだ表現であることはいままでもない。

以上のように、淵明の「擬古」詩は歴史を題材とする傾向があり、それを考慮するならば淵明の「擬古」詩其一の「不在接杯酒」における旅人と「嘉友」の関係は、『漢書』司馬遷伝にみられる司馬遷と李陵の関係を想起すべきであろう。従って、旅人と「嘉友」の関係は、義の精神に支えられた関係を示すものであり、それを軽率なものとは捉えられない。そうであれば「擬古」詩における旅人は、鈴木氏や一海氏のように、語り手が主体となつて旅に出て、信頼すべき「嘉友」と出逢つたものと解すべきであろう。

四

「遂令此言負」の「此言」について、一海氏は「早く帰るつもりだと約束したことば。さきの『不謂行当久』のうちの意味をいう」と説いている。これは一海氏が既に指摘している通り、「不謂行当久」から看取される推察であり、「不謂行当久」から想定し得るものとしては、最も堅実な解釈であるといつてよい。また、古直氏は『楚辞』「抽思」篇に、「昔君与我誠言兮、曰黄昏以為期（昔君と我と言を誠して、曰く黄昏 以て期をなさんと）」とあるのを引用し、再会の約束としている。これは、『楚辞』の当該例を踏まえずとも、「初与君別時」に交わされるであろう会話として十分に想定し得るものであり、解釈としても筋の通ったものといえるだろう。

一方で松枝・和田氏の見解は、「此言」の内実について、「（仕官せずによく帰ってきて共に隠棲しようという）」と解しているのは、現代の諸家の見解にあまりみられない独自性の色濃いものであるが、こと「隠棲しよう」としている点は、「擬古」詩其一全体、及び淵明詩全体の志向性とも合致しているものである。

「擬古」詩其一の第五句から八句の旅先である「中道」とは、『論語』雍也篇に、「冉求曰、非不説子之道、力不足也。子曰、力不足者、中道而廢。今女画（冉求曰く、子の道を説ばずんばあらず、力足らざるなり。子曰く、力足らざる者は、中道にして廢す。今女は画れり）」とみえており、ここでの「中道」とは、冉求が孔子の道に至れないことを歎き、孔子は力不足のものは、道半ばで諦めるものとして用いている。また、「古詩為焦仲卿妻」において、「謝家事夫壻、中道還兄門（家を謝して夫壻に事うるも、中道にして兄の門に還る）」とあるのは、本来であれば「夫壻」に仕えていなければならないにも拘わらず、道半ばで出戻ったことを意味している。

このように「中道」とは、本来定在すべき場所、或いは目指すべきところがあることを意味している。また、淵

明が「行」旅の果てに何を目指していたかといえ、たとえば「始作鎮軍參軍經曲阿作」詩において次のようにうたっている。

我行豈不遥 我が行 豈に遥かならざんや

12 登降千里餘 登り降ること千里餘

目倦川途異 目は川途の異なるに倦み

14 心念山沢居 心は山沢の居を念う

望雲慙高鳥 雲を望みて高鳥に慙じ

16 臨水愧游魚 水に臨みて游魚に愧ず

真想初在襟 真想 初めより襟に在り

18 誰謂形迹拘 誰か謂わん 形迹に拘せらると

聊且憑化遷 聊か且つ化遷に憑るも

20 終反班生廬 終には班生の廬に反らん

(全二十句)

語り手が遥か彼方に旅を続けるなかで、その心中におもいを馳せていたのは「山沢居」であり、それは「班生廬」に暮らすという隠棲の誓いである。このように行旅に身を寄せつつも、隠棲を希求していたことは、「辛丑歳七月赴仮還江陵夜行塗口」詩においても同様である。

昭昭天宇闊 昭昭として天宇闊く

12 島島川上平 島島として川上平らかなり

懷役不遑寐 役を懷いて寐ぬるに遑あらず

14 中宵尚孤征 中宵 尚お孤り征く

商歌非吾事 商歌は吾が事に非ず

16 依依在耦耕 依依たるは耦耕に在り

投冠旋旧墟 冠を投げて旧墟に旋り

18 不為好爵榮 好爵の為に榮がれざらん

養真衡茅下 真を衡茅の下に養い

20 庶以善自名 庶わくは善を以て自ら名づけん

(全二十句)

語り手は第十一・十二句において、眼前に広がる果てしない空と穏やかな川面を鮮やかに対比している。しかしその美しく穏やかな景物とは裏腹に、「役」に対する不安を抱きながら、それでも孤独に進み続けるしかないことをうたっている。そして何時の日にか、「冠」を投げ捨てて故郷に帰ること、高位に縛られず、荒ら屋で「真」を養い、「善」と名呼ぶに相応しい人物になることを願っている。

改めて「擬古」詩其一に立ち返れば、旅先の「中道」の果てにある本来の目指すところは、「君」の待っている「門」の内側の空間であろうことは明らかである。併せて、淵明の隱棲への志向性を考慮すれば、「擬古」詩其一における語り手の願いというのは、「門」の内側の空間において、「君」と隱棲することにあつたと考えられるので

はないだろうか。

以上を踏まえて、「擬古」詩其一の「此言」についていえば、確かに、「早く帰るつもり」といった意味が内在されていようし、再会の約束と解するのも充分に首肯し得るものである。しかしながら語り手にとって、「早く帰る」ことや、再会することのさらに先には、「君」と隠棲する目的があつたのであろう。従つて、「遂令此言負」は、「君」には隠棲する誓いに背かせることになつたと解することにした。

なお、「遂令此言負」において、「令」字を用いているのは、待ち人の堪え難かつた憂苦を察してのことであろう。たとえば、徐幹の「室思」詩其一には、「良会未有期、中心摧且傷（良会 未だ期有らず、中心 摧けて且つ傷む）」（全十句中第三聯）とあり、待ち人の憂苦として再会の期日すら分からず、その心中はくじかれて損なわれることをうたっている。これは、「古詩十九首」其一の「道路阻且長、会面安可知」（第三聯）にも通じるものであり、この一聯を待ち人の視点から解すれば、親しい人の旅路の厳しさと、何時再会し得るのか分からない憂苦をうたっていることになる。そしてこのような憂苦は、同詩の第十三句に「思君令人老」とあるがごとく、待ち人の生命までも憔悴させる。さらにまた「古詩十九首」其二の末聯に、「蕩子行不帰、空牀難独守」とあり、「蕩子」が何時までも帰つて来ないのであれば、寢床を独りで守り続けることは難しいとうたっている。ここには、待ち人の旅人に対する迷いの情がみて取れよう。このように親しい人の長い旅というのは、故郷の待ち人に堪え難い苦しみを与え、さらには待ち人の裏切りまでも引き起こしかねない。

改めて「擬古」詩其一の「遂令此言負」において、「此言」に背かせたとうたっている点についていえば、自己の長い旅が待ち人の堪え難い憂苦を与え、「君」の裏切りを引き起こした原因があくまでも自己に起因すること、それを認めているのであろう。

五

最後に末四句に検討を加えて考察の結びとしたい。改めて末四句を掲げる。

多謝諸少年 多謝す 諸少年

12 相知不忠厚 相い知ること忠厚ならず

意気傾人命 意気 人命を傾く

14 離隔復何有 離隔 復た何か有らん

「多謝^た」は、挨拶を意味する。「忠厚」は、『荀子』礼論篇に、「事生不忠厚……送死不忠厚（生に事えて忠厚ならず……死を送りて忠厚ならず）」とあるのに由来する誠実な態度を意味し、ここでは「君」、そして「諸少年」に向けて、互いの関係の不誠実さをうたう。「意気」は、気概をいう。盧諶の「贈劉琨」に、「昔聶政殉嚴遂之顧、荆軻慕燕丹之義。意気之間、靡軀不悔（昔、聶政は嚴遂の顧に殉じ、荆軻は燕丹の義を慕う。意気の間、軀を靡すも悔いず）」（『文選』巻二十五）とある通り、聶政と嚴遂、荆軻と燕丹といった男児の気概ある関係を想起させる。この気概ある関係を「擬古」詩に照らして考えるならば、嚴遂や燕丹に当たるのは語り手であり、聶政や荆軻に当たるのは、「君」、及び「諸少年」であろう。語り手は、「君」、及び「諸少年」に対して聶政や荆軻の熾烈な精神をみていた。そして、そのような「意気」があり、「人命」を懸けていたならば、「離隔」など問題なかつたはずと呼び掛けている。

おわりに

本稿では、淵明の「擬古」詩其一における語り手の立場は、旅人か、あるいは待ち人か、という議論の対立に検討を加えた。先学の見解において、語り手の立場を待ち人として、旅人を「君」とするのは、第八句に「不在接杯酒」とあり、「君」が「嘉友」と酒杯を酌み交わす以前に、相手のことを信頼したものとして否定的に捉えていることに拠る。しかしながら、「不在接杯酒」というのは、義の精神に支えられた関係を示すものであり、それを軽率な関係とはし難いものであった。そうであれば淵明の「擬古」詩其一は、語り手自身が主体として旅に出て、信頼し得る「嘉友」と出逢ったものと解すべきであろう。また、第十句「遂令此言負」の「此言」については、「擬古」詩其一体、及び淵明のほかの行旅のうたから看取される隠棲への志向性を考慮して解することにした。なお、「此言」が不明瞭であることは、先学の指摘する「擬古」詩九首の刺世詩的性格であることを考慮しなければならぬが、そういった観点からの考察は不十分であった。今後の課題とすることにした。

以上の考察を踏まえて、試みに私訳を付せば次の通りである。なお、第一句から八句は、語り手の故郷からの回想として捉えている。

窓の下で盛んに咲き誇っていた蘭、座敷の前でこんもりと茂っていた柳。かつて君と別れた時には、こんなにも長旅になるだろうとはおもいもししていなかったよ。

門を出たわたしは万里をゆく旅人となり、道半ばで（李陵のごとき）よき友に巡り会った。彼が何も言わないうちに真つ先に心酔したよ、酒杯を酌み交わすような仲では無かったがね。

そして今となつては、蘭は枯れ果て柳も衰えてしまい、かくして（長過ぎた旅によつて）君には（隠棲すると誓つた）ことばに背かせることになつた。

挨拶を送ろう少年たちよ、互いの関係は誠実さを欠いたものであつた。しかし気概があつて生命を賭していたならば、離れ隔たつていたことなど何も問題ないはずだが。

* 底本には陶澍『靖節先生集』（四部備要本）を用い、必要に応じて諸版を参照する。

◇ 鈴木虎雄『陶靖節詩解』（東洋文庫、一九九一年）

◇ 内田泉之助、星川清孝『古詩源』（漢詩大系四〇五、集英社、一九六四年～一九六五年）下巻

* 一海知義『陶淵明』（世界古典文学全集・二五、筑摩書房、一九六八年）

* 張蔭嘉は、「此擬出門結客、懷家而不帰帰之詩（此れ出門結客に擬う、家を懐いて而るに帰せざるの詩）」（張玉穀『古詩賞析』振新書社、一九二五年）と述べている通り、語り手を旅人している。

◇ 龔斌『陶淵明集校箋』（増訂本、里仁書局、二〇〇七年）

* 謝先俊・王勛敏『陶淵明詩文選訳』（巴蜀書社、一九九一年）

* 中国の代表的な諸家の見解を幾つか紹介しておく、たとえば、丁福保氏の見解は必ずしも断定し得ないものであるが、第六句の「心先酔」の先行用例として、『莊子』応帝王篇に、「列子見之而心酔（列子之を見て心酔す）」とあるのを引用している。これは列子が見かけ倒しの巫女に欺かれた話であることから、「嘉友」のことを否定的なイメージで捉えている。そのことからすれば語り手の立場を待ち人として想定しているように思われる。なお、丁福保氏は程穆衡の「相知不忠厚、責其負言也。如此而称嘉友、雖意氣相傾、離隔何惜哉（相い知ること忠厚ならず、其の言に負くを責むるなり。此くの如くして嘉友を称す、意氣相い傾くと雖も、離隔何ぞ惜しまんか）」（『陶淵明詩箋』芸文印書館、一九六四年）を支持している。また、王叔岷氏の見解は、引用する用例も多様であり、

判然としない。なお、総評として「第一首歎忠厚之道衰、交道所以薄也（第一首 忠厚の道の衰え、交道の以て薄たる所を歎くなり）」（『陶淵明詩箋証稿』芸文印書館、一九七五年）と述べている。また、遠欽立氏（『陶淵明集』中華書局、一九七九年）の見解も判然としない。

◎松枝茂夫・和田武司『陶淵明全集』（岩波文庫、一九九〇年）

*10 田部井文雄・上田武『陶淵明全釈』（明治書院、二〇〇一年）

*11 劉履は語り手を旅人として、「君指晋君（君は晋君を指す）」（宋志英・南江濤『文選研究文献輯刊』国家図書館出版社、二〇一三年所収の『選詩補注』巻五に拠る）としており、語り手を待ち人とする吳瞻泰は、「君字泛指、不必泥晋君。此歎中道改節之人、徒矜意气、反覆不常也（君字は泛指にして、必ずしも晋君に泥せず。此れ中道に節を改むるの人を歎ず、徒らに意気を矜り、履に反して常ならざるなり）」（四庫全書存目叢書所収『陶詩彙注』）と述べている。

*12 第十一から十四句にうたわれる内容についても見解が分かれており、たとえば語り手を旅人とする釈清潭氏は、第十三句の「意气傾人命」については、「其の意气、人命を傾倒せしむるに至る」として、旅人と「嘉友」の関係をうたったものとし、第十四句の「離隔復何有」については、「千里万里隔つるを初めは恨みに思うたが、其の意気を察すれば、我と非常に離隔して居るも恨むところはあらず」と解している通り、旅人と「少年」についてうたったものとしている。これについては鈴木虎雄氏も同様である。一方で、唐満先氏は、語り手を待ち人として、「嘉友」と「君」、及び「諸少年」との関係の不安定さをうたったものとして、「多多告訴各位少年、你們的相交不忠厚、你們和新朋友意气相投可以犧牲性命、你們離別之後又什麼情義呢（くれぐれも少年達に伝えることにしたい、あなた達の交際は真心からではない、あなた達が新しい友人と意气投合して生命を懸けようとしても構わないが、あなた達が離別した後に一体どうして友情・信義が残ろうか）」（『陶淵明集浅注』江西人民出版社、一九八五年）と解している。

*13 孫鈞錫『陶淵明集校注』（中州古籍出版社、一九八六年）

*14 釈清潭『陶淵明集』（國民文庫刊行会、一九二九年）

*15 『玉台新詠箋注』（中華書局、一九八五年）上冊

*16 「此」字は、『爾雅』釈詁に、「茲・斯・咨・皆・已、此也」とあり、邢昺疏は、「此者、对彼之称、言近在是也（此とは、彼に對するの称、言うところは近く是こに在るなり）」と説くように、「彼」字と對義の關係にある。

*17 「言」は、『礼記』曲礼上に、「史載筆、士載言（史は筆を載せ、士は言を載す）」とあり、鄭玄が「言、謂会同盟要之辞（言は、会同盟要の辞を謂う）」と注しているように、誓言といった約束の義を有している。

*18 古直『陶靖節詩箋』（広文書局、一九六四年）に拠る。なお、王叔岷氏は古直氏の見解を支持している。

*19 『楚辞補注』（中華書局、一九九三年）

*20 『文選』の引用に当たって本文、及び李善注などは胡刻本『文選』中華書局、一九七七年を用い、五臣注の引用に当たっては、『日本足利学校蔵宋刊明州本六臣注文選』人民文学出版社、二〇〇八年を用いた。

*21 吉川幸次郎「推移の悲哀——古詩十九首の主題」（『吉川幸次郎全集』巻七に拠る）下を参照。なお、「推移の悲哀——古詩十九首の主題」は、『中國文學報』十号、一九五四年四月に上、一二号、一九六〇年四月に中、一四号、一九六一年四月に下が収録される。

*22 随樹森『古詩十九首集釈』（中華書局、一九五五年）

*23 参考までに陸機の「擬行行重行行」詩を掲げておく。「悠悠行邁遠、戚戚憂思深。此思亦何思、思君微与音。音微日夜離、緬邈若飛沈。王鮪懷河岫、晨風思北林。遊子眇天末、還期不可尋。驚颺褰反信、歸雲難寄音。佇立想万里、沈憂萃我心。攬衣有余帶、循形不盈衿。去去遺情累、安処撫清琴（悠悠として行き邁きて遠く、戚戚として憂いの思い深し。此の思い亦た何をか思わん、君が微と音とを思う。音微 日に夜に離れ、緬邈として飛沈するが若し。王鮪は河岫を懐い、晨風は北の林を思う。遊子は天の末に眇かなれば、還る期は尋ねべからず。驚颺は反しの信を褰い、歸雲には音を寄せ難し。佇立して万里を想えば、沈憂は我が心に萃る。衣を攬れば余帶有り、形を循むれば衿に盈たず。去で去でて情累を遺て、安かに処りて清琴を撫でん）」（『文選』巻三十）

*24 王文誥・孔凡礼『蘇軾詩集』（中華書局、一九八二年）第八冊・卷五十

*25 蘇東坡書『陶淵明集』（京江魯氏藏本、中華再造善本）

*26 劉琨は「扶風歌」において、「惟昔李騫期、寄在匈奴庭。忠信反獲罪、漢武不見明（惟れ昔 李は期を騫ち、寄せて匈奴の庭に在

り。忠信にして反つて罪を獲て、漢武には明かされざりき」(『文選』卷二十八)とうたっているように、李陵を「忠信」と評している。²⁹

*27 『漢書』(中華書局、一九六二年)

*28 曹融南『謝宣城集校注』(上海古籍出版社、一九九一年)

*29 『史記』(中華書局、一九五九年)

*30 司馬遷は李陵について、「自奇士、事親孝、与士信、臨財廉、取予義、分別有讓、恭儉下人、常思奮不顧身以徇國家之急(自のずから奇士、親に事えては孝、士と与りては信、財に臨みては廉、取予には義、分別にして讓れる有り、恭儉にして人に下り、常に思奮して身を顧みずして以て國家の急に従う)」として、孝行、誠実、清廉、さらには節義に溢れ、國家の存亡において身命を賭すものとする。

*31 淵明詩文には「遂令此言負」のほかに、「令」字を使役として用いる例はみられない。また第一句から四句の措辞が「古詩十九首」其一・其二に近似していることを踏まえると、古詩的な措辞として「古詩十九首」其一の「思君令人老」(第十三句)の「令」字を意図している可能性が高い。また、「思君令人老」は、「君」のことをおもうと、老いさせられるとをうたい、「遂令此言負」は、長い旅によって、「君」に「此言」に背かせたことをうたっており、両者は親しい人との空間的な隔たりに起因して、引き起こされている点で通底している。

*32 『漢書』趙広韓伝に、「至府、為我多謝問趙君(至府に至らば、我が為に多謝して趙君に問え)」とあり、顔師古は、「多、厚也。言殷勤、若今人言千万問訊矣(多は、厚なり。殷勤を言うなり、今人千万問訊に言うが若し。)」と注している。また、「古詩為焦仲卿妻」の末聯に、「多謝後世人、戒之慎勿忘(多謝す後世の人、之を戒めて慎しみて忘るるなかれ)」とあり、後世に対して訓戒を述べる際に用いることもある。いずれとも取れようが、本稿は「擬古」詩九首が刺世詩と評されることを踏まえて、今という現在を生きたる若者に向けてうたわれたものと判断し、前者の挨拶の義で解することにした。

*33 王先謙『荀子集解』(中華書局、一九八八年)に拠る。なお、「忠厚」は、史書において人物批評のことばとして散見されるが、現

存する六朝期の詩歌では淵明の「擬古」詩其一のほかにはみられない。

*34 「離隔」の淵明に先行する用例は、現存する詩歌においては曹植の「離友」詩其二に「涼風肅兮白露滋、木感氣兮葉葉辭。臨淥水兮登崇基、折秋華兮采靈芝。尋永帰兮贈所思、感離隔兮會無期。伊鬱悒兮情不怡（涼風肅として白露滋く、木は氣に感じて葉葉辭つ。淥水に臨み崇基に登り、秋華を折り靈芝を采る。永帰を尋ねて思う所に贈らん、離隔に感ずるも会うに期無し、伊に鬱悒して情怡しませず）」とみえている。このうたは「離友」詩と題されているように、語り手自身が旅人として、親しい待ち人におもいを綴つた作品である。その親しい友は、このうたに冠せられた序文に、「郷人有夏侯威者、少有成人之風。余尚其為人、与之昵好。王師振旅、送余於魏邦。心有眷然、為之隕涕。乃作離友之詩（郷人に夏侯威なる者有り、少くして成人の風あり。余其の為人を尚び、之と与に昵好す。王師旅に振いて、余を魏邦に送る。心に眷然たる有り、之が為に隕涕す。乃ち離友の詩を作る）」とあるように、夏侯威、字は季権を指している。語り手は旅に身を寄せるなかで、第五句の「所思」の夏侯威におもいを馳せ、「離隔」していることに憂い、再会の期日すら分らないことに寂しさを募らせている。

*35 鮑照の「代雉朝飛」に、「握君手、執杯酒、意氣相傾死何有（君の手を握り、杯酒を取り、意氣相傾ければ死すら何か有らん）」（錢仲聯『鮑參軍集注』中華書局、一九八〇年）とあり、錢仲聯氏は、「擬古」詩の本聯を承けているとする。

*36 李善注には、謝承の『後漢書』を引用して、「楊喬曰、侯生為意氣剋頸（楊喬曰わく、侯生意氣剋頸為り）」とある。「侯生」については『後漢書』朱暉・孫穆伝の「崇厚論」に、「又專諸、荊卿之感激、侯生、予子之投身、情為恩使、命緣義輕……古之善交者詳矣（又專諸、荊卿の感激し、侯生、予子の身を投ぜしは、情は恩の為に使われ、命は義に縁つて軽し……古の善く交わる者は詳らかなり）」（中華書局、一九六五年）とある。

*37 王叔岷氏は、「擬古」詩其一の第三句「初与君別時」について、「古詩十九首」其一の「与君生別離」のほかにも曹植の「種葛篇」の第三句に、「種葛南山下、葛蔓自成陰。与君初婚時、結髮恩義深。欲愛在枕席、宿昔同衣衾。窃慕棠棣篇、好樂和瑟琴。行年将晚暮、佳人懷異心。恩絶曠不接、我情遂抑沉……（葛を種う南山の下、葛蔓自ら陰を成す。君と初めて婚せし時、結髮恩義深し。欲愛枕席に在り、宿昔衣衾を同じくす。窃かに慕う棠棣の篇、好樂瑟琴に和す。行年将に晩暮ならんとし、佳人異心を懷く。恩絶

えて曠しく接せず、我が情遂に抑沈す……」（全二十六句中第一句から十二句）とあるのを類例として引用する。このうたは、親しい人との甘美な想い出を回想としてうたい、そこから今の絶望に至る展開としてたわれている。

（筑波大学大学院人文社会科学研究所博士課程）